

晏子楹書攷

久富木 成 大

はじめに

一 景公の遊び

二 死と現実の世界

(イ) 病氣と祝宗と氣 (ロ) 死と葬

三 国の興亡と礼

おわりに

注

はじめに

『晏子春秋』の目錄学上の位置づけは定まっていない。『漢書』芸文志では儒家に入れ、『四庫全書』では史部伝記類に収めている。唐代の柳宗元は、墨家の書であると考えた（『柳河東集』卷四）。一方ではまた、洪亮吉をはじめとする清朝の諸学者や、民国に入ってから劉師培らは、従来の儒家あるいは墨家説に疑問を投げかけた。こうした新しい立場の延長線上に現代の学者、呉則虞（一九一三

年（一九七七年）の見解がある。彼は、「政治思想性のつよい、古典文学作品であり、また我が国の最も早い時期の短篇小説集である」と、『晏子春秋』のことを述べている（『晏子春秋集釋』一九六二年中華書局出版）。

『晏子春秋』が小説であるにしても、そこには、晏平仲の事績が色こく伝承されているということは否定できないであろう。『晏子春秋』は、『史記』管晏列伝や『淮南子』要略篇等に、その内容が引かれている。したがって呉則虞もいうように、西漢時代には、この書はかなり流通していたものようである。そのため、その成書の年代にしても、呉則虞のいうように、秦代と見るのも、あながち早すぎはしない。

『晏子春秋』の話題のなかで、一つの大きな柱として目立つのは、景公の遊びの場面である。その遊びの場面において景公は楽しむのではなく、往々にして嘆き悲しむことが多い。こうした景公の遊びとは何であったのか。そうしてまた、景公の遊びをめぐる晏平仲の言動を通じて、この書の作者は、晏平仲にかかわる多くの伝承

の中から、いかなるものとして晏平仲の思想を形成していこうとしているのかということをも考えてみたい。このことによつて、『晏子春秋』の目録学上の位置づけの、一つの方向性だけでも見出すための役わりをはたせるかも知れない。なお、小稿においては、晏子の楹書、つまり彼の遺書を『晏子春秋』全書の構造と有機的に連関させ、そこからその遺書の持つ意味をさぐることに、如上の目的に迫つてみたいと思う。

一 景公の遊び

日々の生活のなかにおいて、なんらかの意味で精神の安らぎを得ようとして、いわゆる「遊び」ということを、人は行うことが多い。こうした遊びにも、人によつて、時と場合に依じてそれぞれ異なる形態があるのは当然であるが、その作用もまた一律ではない。なかでも齊の景公の場合は異様である。

『晏子春秋』のなかでは、齊の君主、景公（在位西曆紀元前五四七年―同四九〇年）の「遊び」について言及することが多い。しかしながら景公の場合、その遊びが、しばしば悲しみ、泣くことや、深い憂えをさそうきつかけとなるということには、注目がはらわれなければならない。

○景公牛山に遊び、北その國城に臨みて涕を流して曰く、若何ぞ滂滂としてここを去りて死せんや、と。艾孔・梁丘據、皆從ひて泣く。晏子、獨り旁に笑ふ。公、涕をぬぐつて晏子を顧みて曰く、寡人、今日の游悲し。孔と據と皆寡人に從ひて涕泣す。

子獨り笑ふは何ぞや、と。晏子對へて曰く、賢者をして常に之を守らしめば、則ち太公・桓公將に常に之を守らんとす。勇者をして常に之を守らしめば、則ち莊公・靈公將に常に之を守らんとす。數君の者將に之を守らんとせば、則ち吾が君安んぞ此の位を得て立たん。其の迭に之に處り迭に之を去るを以て、君に至れるなり。而るに獨り之がために流涕するは是れ不仁なり。不仁の君一を見、諂諛の臣二を見る。此れ臣が獨り竊かに笑ふ所以なり、と。（景公遊于牛山、北臨其國城、而流涕曰、若何滂滂、去此而死乎、艾孔梁丘據、皆從而泣、晏子獨笑于旁、公刷涕、而顧晏子曰、寡人今日游悲、孔與據、皆從寡人而涕泣、子之獨笑何也、晏子對曰、使賢者常守之、則太公桓公將常守之矣、使勇者常守之、則莊公靈公將常守之矣、數君者將守之、則吾君安得此位而立焉、以其迭處之、迭去之、至于君也、而獨爲之流涕、是不仁也、不仁之君見一、諂諛之臣見二、此臣之所以獨竊笑也。』『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一）

國都臨淄の南郊にある牛山に景公はハイキングに出かけた。山上から齊の國城をながめて、景公は涙を流したという。それは、すばらしい國都を遠望するにつけても、やがて死んでゆかなければならない自分の運命が、このうえもなく悲しいものとして認識されたからに外ならない。そうした景公の涙は、侍坐している二臣の涙をさそつた。しかし、それを見て晏子は笑つた。晏子には死があることが当然のこととして考えられ、死の至ること自体は悲しみをさそつた材料とはならなかつたのである。逆に、死があるからこそ祖先がつぎつぎに死亡し、景公は祖先から齊國の國城をあずかる君主として

の地位を得ているのである。という思いが晏子にはあつたのである。

○景公出でて公阜に遊び、北面して齊國を望睹して曰く、嗚呼、古へより死無からしめば何如、と。晏子曰く、むかし、上帝、人の死を以て善と爲す。仁者は思い、不仁者は伏す。もし古(いにしへ)より死なからしめば、丁公太公將に齊國を有せんとし、桓襄文武將に皆これに相たらんとす。君將に笠を載き褐を衣(き)、銚耨を執りて、以て吠畝の中に蹲行せんとす。孰ぞ死を患ふるに暇あらん、と。公、忿然として色をなして説ばず。(景公出遊于公阜、北面望睹齊國曰、嗚呼、使古而無死何如、晏子曰、昔者上帝以人之死爲善、仁者息焉、不仁者伏焉、若使古而無死、丁公太公將有齊國、桓襄文武將皆相之、君將載笠衣褐、執銚耨、以蹲行吠畝之中、孰暇患死、公忿然作色不説)『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一)

ここでは、公阜に齊の景公は遊んだことになっている。前引の文章と同じく、ここからはるかに國都を望見し、やがて死をむかえるであろう自分のことを、景公は悲しむのである。それに対して、晏子は以下のようにいった。かつて齊にはすぐれた國君が相ついで出て、國を治めた。景公の器は、そうした先君達に比べれば、見劣りがする。人間に死がなくて、すべてそれらの先相方が存命であつたとしたら、景公は國政をゆだねられるかどうかはおぼつかない。せいぜい農民の一人として働けるぐらいのもので、國政を執ることなど思いもよらないであろう。人間に死があつて、先君たちがつぎつぎに死んでいき、王位を交代したからこそ、景公も位につくことができたのではないか、と。この晏子のことばに、景公はここにいう

ように色をなして怒つたのである。また、この公阜に遊んだとき、つぎのようなことがあつた。

○幾何もなくして日暮る。公西面して彗星を望睹して、伯常騫を召し、之を禳ひ去らしむ。曰く、不可なり。是れ天教なり。日月の氣、風雨時ならず。彗星の出づる、天、民の亂るるがために之を見はす。故に之に妖祥をつけ、以て不敬を戒む。今、君もし文を設けて諫を受け、聖賢人に謁せば、去らずと雖も、彗星將に自ら亡びんとす。今、君、酒を嗜みて樂に并し、政飾めずして小人に寛にし、讒を近づけ優を好み、文を惡みて聖賢人を疏んず。何の暇か彗に在らん。第(はい)また將に見はれんとす、と。公忿然として色を作して悦ばず。晏子卒するに及びて、公いでて背して立ち、曰く、嗚呼、昔者夫子に從ひて公阜に遊びしに、夫子一日にして三たび我を責めたり。今、誰か寡人を責めんや、と。(無幾何日暮、公西面望睹彗星、召伯常騫、使禳去之、曰、不可、此天教也、日月之氣、風雨不時、彗星之出、天爲民之亂見之、故詔之妖祥、以戒不敬、今君若設文而受諫、謁聖賢人、雖不去彗星將自亡、今君嗜酒而并于樂、政不飾而寬于小人、近讒好優、惡文而疏聖賢人、何暇在彗、第又將見矣、公忿然作色不悅、及晏子卒、公出背而立、曰、嗚呼、昔者從夫子而游公阜、夫子一日而三責我、今誰責寡人哉)『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一)

公阜での時間の経過は、景公主従にとつては早い。遊びは、人々の精神を、その中に集注させるものであるからである。こうした面をとらえて、ここに引いた文章では「幾何もなくして日暮る」との

べている。暗やみに国都の遠望がかき消され、代りに星のまばたきが目に入ってくる。そのとき、彗星が尾を引いて流れた。景公の心中を、そのとき不吉な思いがよぎった。そのため、臣下の伯常騫がよばれ、お祓いをし、災いを退けることになった。それに対して晏子は反対した。

晏子はいふ。彗星があらわれるのは、なるほど妖祥、つまり悪いことのおこるきざしに外ならない。しかし、それは物いえぬ民のために、君主にしいたげられている民の苦しみを、民に代つて天が君主に告げ、教えているのである、と。今、景公は政治をないがしろにし、酒と音楽にふけり、しかも身边に小人や優倡を近付け、賢者を遠ざけている。祓いなどする暇があつたら、これらの遠ざけられている賢人たちに会つて教えを受けた方が、どれほどよいであろうかと、晏子は諫言する。晏子自身も、この彗星を、なんらかの災いが景公の身におこる前兆であるという考えであり、その限りにおいて、二人は同じ立場に立っているのである。そして、その彗星を、ここに晏子は「日月の気」の一つのあらわれであるとしてとらえていることに注目しなければならぬ。景公も、晏子も、ともに遊びという現実の場でありながら、彗星という、あるいみで現実を超えた、「気」の世界と対応していることになる。晏子は、しかし、この「気」の世界を直視しながらも、あるいは又、それを直視することによって、現実の世界を引きしめ、正そうとする。彗星の出現を天の教えとして、景公の関心を、失政の是正へと導こうとするのである。

景公の遊びについては、又、以下のような記述もある。

○景公寒塗に出遊し、死骸をみ、默然として問はず。晏子諫めて

曰く、昔、吾が先君桓公出遊するに、饑うる者を睹れば、之に食を與へ、疾める者をみれば、之に財を與ふ。使令力を勞せず、籍斂民を費さず。先君まさに遊ばんとすれば、百姓みな悦びて曰く、君まさに幸に吾が郷に遊ぶべきかと。今、君、寒塗に

遊べば、四十里に據るの氓、財を彈(つ)くすも以て斂に奉ずるに足らず、力を盡くすも役に周き能はず、民氓饑寒凍餒し、死骸相望む。而して君問はず。君道を失へり。財屈き力竭き、下以て上に親むことなく、驕泰奢侈、上以て下に親むことなく、上下こもこも離れ、君臣親なきは、此れ三代の衰ふる所以なり。今、君之を行ふ。嬰、公族の危ふく、以て異姓の福と爲らんことを惧るるなり。公曰く、然り。上と爲りて下を忘れ、籍斂を厚くして民を忘る。吾が罪大なり、と。是に于て死骸を斂めて粟を民に發す。四十里に據るの民、政に服せざること其年。公、三月出游せず。(景公出遊于寒塗、睹死骸、默然不問、晏子諫曰、昔吾先君桓公出遊、睹饑者、與之食、睹疾者、與之財、使令不勞力、籍斂不費民、先君將遊、百姓皆悅曰、君當幸遊吾郷乎、今君游于寒塗、據四十里之氓、彈財不足以奉斂、盡力不能周役、民氓饑寒凍餒、死骸相望、而君不問、失君道矣、財屈力竭、下無以親上、驕泰奢侈、上無以親下、上下交離、君臣無親、此三代之所以衰也、今君行之、嬰懼公族之危、以爲異姓之福也、公曰然、爲上而忘下、厚籍斂而忘民、吾罪大矣、于是斂死骸、發粟于民、據四十里之民、不服政其年、公三月不出遊)『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一)

寒塗に遊んだ景公は、死体を見た。遊樂の明るい気分が一転して暗鬱な重苦しいものに変化する。それは餓死した民の遺体であった。野に放置されたそれらの死体は、重税をとりたてて奢侈にふけていた景公の暴政の犠牲者たちの、変わりはてた姿であつたのである。景公は死体から目をそむけた。そうして、そこに死体がある理由を問おうとはしなかつた。そのため、晏子はつぎのように実情を説明した。つまり、この寒塗の地の民は高い税金に苦しみ、また苛酷な賦役にたえられず、饑えと寒さによってバタバタとたおれ、こうして死体が数えきれなくらいに道ばたに放置されているのである、と。晏子のこのことばによつて、景公は遊びの場のうかれた気持からはなれ、死者たちの冥界での安らかさを思つて、それらを埋葬したのである。また、寒塗の民に穀物をふるまうこともした。冥界の民と、現実世界の民と、両方のことを思いやつたのであつた。

ここに、『晏子春秋』の中から、景公の遊びのことを述べる四つの場面を引用した。これらに共通していることは、遊びという、本来、楽しくて、明るさに満ちているはずのものが、突然暗転して、死や、死を連想させるような不吉な現象にたつたことである。このことを一般化して考えるいとぐちを与えるのは、彗星をめぐつての場面である。ここでは、遊びが、現実の世界と、現実を超えた世界、あるいはまた、物の世界と氣の世界といつてもよいが、そうした二つの次元の異なつた世界をむすびつける働きをしているのであると見る事ができるであらう。

晏子楹書攷 (久富木成大)

二 死と現実の世界

(1) 病氣と祝宗と氣

すでに第一章でみてきたように、景公と晏子とのあいだでは、遊びの場面において、死についての問答がしばしばかわされていた。こうしたことからも、死についての関心が、景公を中心とする齊の王室において、いかに強かつたかということがわかるであらう。『晏子春秋』で説かれる、死をめぐる話題について考えるに先立ち、一般に死と深くかわつて見なされるところの、病氣に関連する諸事象について、いろいろと検討しておきたい。

○景公、疥して且つ瘧し、暮年にして已えず。會譴、梁丘據、晏子を召してこれを問ひて曰く、寡人の病(やまひ)病(へい)なり。史固と祝佗とをして山川宗廟を巡らしめ、犠牲珪璧備具せざるなく、數は其れ常に先君桓公より多し。桓公は一なれば則ち寡人は再なり。病いえずして滋(ますま)す甚だし。予、二子の者を殺して、以て上帝に説かんと欲す。其れ可なからんか、と。會譴、梁丘據曰く、可なり、と。晏子對へず。公曰く、晏子は如何、と。晏子曰く、君、祝を以て益ありと爲すか、と。公曰く、然り、と。若し以て益ありと爲さば、則ち詛もまた損あらん。君、輔を疏んじて拂を遠ざけ、忠臣擁塞して、諫言出でず。臣これを聞く、近臣黙し、遠臣瘖し、衆口金を鏗(と)かす、と。今、聊攝より以東、姑尤より以西は、此れ其の人民衆し。百姓の咎怨誹謗し、君を上帝に詛する者多し。一國詛し

晏子楹書攷 (久富木成大)

て、兩人祝す。善く祝する者と雖も、勝つ能はざるなり。且つ夫れ祝、情を直言すれば、則ち吾が君を諂るなり。過を隱匿すれば、則ち上帝を欺くなり。上帝神ならば則ち欺くべからじ。上帝神ならずんば祝もまた益なからん。願はくは君これを察せよ。然らずして無罪を刑するは、夏商の滅びし所以なり、と。

公曰く、善く余が惑を解け、冠を加へよ、と。會讎に命じて齊國の政を治むることなく、梁丘據に賓客の事を治むることなくらしめ、兼ねて之を晏子に屬す。晏子辭す。命を得ず。相を受けて退く。政を把ること改月にして、君の病いえぬ。公曰く、昔わが先君桓公は、管子を以て力ありと爲し、孤と穀とを邑にして、以て宗廟の鮮に共せり。其の忠臣に賜へば、則ち是れ忠臣なる者多し。子は今の忠臣なり。寡人請ふ、子に州款を賜はん、と。辭して曰く、管子は一の美あり、嬰しかざるなり。一の惡あり、嬰なすに忍びざるなり。其の宗廟の養は鮮なり、と。終に辭して受けず。(景公疥且瘡、暮年不已、召會讎・梁丘據・晏子而問焉曰、寡人之病病矣、使史固與祝佗、巡山川宗廟、犧牲珪璧莫不備具、數其常多先君桓公、桓公一則寡人再、病不已滋甚、予欲殺二子者、以説于上帝、其可乎、會讎・梁丘據曰、可、晏子不對、公曰、晏子何如、晏子曰、君以祝爲有益乎、公曰、然、若以爲有益、則詛亦有損也、君疏輔而遠拂、忠臣擁塞、諫言不出、臣聞之、近臣黙、遠臣瘖、衆口鑠金、今自聊攝以東、姑尤以西者、此其人民衆矣、百姓之咎怨誹謗、詛君子于上帝者多矣、一國詛、兩人祝、雖善祝者、不能勝也、且夫祝直言情、則謗吾君也、隱匿過、則欺上帝也、上帝神則不可欺、上帝不神、

祝亦無益、願君察之也、不然刑無罪、夏商所以滅也、公曰、善解余惑、加冠、命會讎毋治齊國之政、梁丘據毋治賓客之事、兼屬之于晏子、晏子辭、不得命、受相退、把政改月、而君病瘳、公曰、昔吾先君桓公以管子爲有力、邑狐與穀、以共宗廟之鮮、賜其忠臣、則是多忠臣者、子今忠臣也、寡人請賜子州款、辭曰、管子有一美、嬰不如也、有一惡、嬰不忍爲也、其宗廟之養鮮也、終辭而不受。『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一)

景公は、夏のうちから、「痒疥」、つまり皮膚のかゆくなる病氣を患っていた。それが長びいて秋になると内臓にまで病氣が侵入し、ついに「瘡寒」といわれる熱病にまで病勢が深化してしまつた。その病氣を治すために景公は、山川宗廟に祝を派遣して回復を祈らせられた。それも形ばかりのものではなく、伝えられる先君桓公のものよりも二倍ほどの豊富なお供え物を捧げてである。しかし、一向に病勢はおとろえる気配はなかつた。そのため、景公は犠牲として二人の人間を殺して神々に捧げる心づもりで、臣下にはかつた。二人の臣下はそれを支持した。しかし、晏子はその景公の計画に反対した。しかも、景公の病氣への対応の出発点である祝の派遣そのものにまさかのぼって、晏子は強い疑念を發した。

巫祝が、人間の真心を神にとりつき、告げるものであるならば、同じく人間である民の呪詛の念も、等しく神に通ずるであろう。だとすると、二人の祝の病氣回復の願いと、国の大半の、景公の惡政を咎怨誹謗する人民の呪詛の声とは、どちらがより大きく神を動かすかは明白であろう。また、国内の、こうした民の不満や苦しみを無視し、景公の過ちを隠して、神に祈るのだとすれば、それは神を

欺くことになるであろう。しかし、上帝が真に神聖であるならば、そのような祝の欺言は、ただちに偽りが見破られるであろう。又、上帝が神聖でなければ、いくら祝が祈ったにしても、現実には何の利益もたらさないであろう。そのため、景公の病氣回復には、何の役にもたないはずである。さらに、罪もない者を殺して、犠牲に供するのは、よくない。夏や商の滅亡の原因に、それはならうことである。ほば以上のようなことを、晏子は景公に説いた。

晏子の説くところは、上帝、つまり神の下にあっては、いかなる虚偽も成立しえないのであるということ、人命を尊重するという立場とである。この主張は景公に認められ、悪政の支持者であるところの二臣が退けられ、代わり晏子が宰相として景公の政治を助けることになった。こうして内政が整えられ、国内の人民の呪詛の声も止んだのであろうと思われる。その結果を、『晏子春秋』では、「改月にして、君の病、悛（い）ぬ」と記している。

景公の疥と瘡とは、山川宗廟に祈った祝によって癒されたのではなく、晏子が政治をとったことからなされたのであると、『晏子春秋』では、その因果関係をとらえているのである。こうしてみると、景公の病氣の原因も、結局のところ、佞臣の言にしたがって行った、景公の失政が、そのもとにあったのであると、『晏子春秋』ではとらえているのであるとみてよいであろう。国内の政治の動向は、君主たるもの、それにいかに顔をそむけ、逃れたにしても、逃れきることができないものではない。結局は、君主としての良心の責めを負うことになる。ことをかえれば、この責めによる苦しみは、「氣」の変調、あるいは衰えとしてとらえることができるであろう。国内の

乱れによって、景公は、「氣」の乱れを、自身の体内に來たしたのだと考えられる。景公の病狀の経過からして、『晏子春秋』でも、こうした考えを、その根底に持っていたのだということを推知してもよいであろう。そのことは、以下のような、前述の引用文と類似するところの、『晏子春秋』の文章を対比し、重ねあわせてみることによって、明らかになるのである。

○景公、晏子に問ひて曰く、寡人意氣衰へ、身病むこと甚だし。

今、吾れ珪璋犠牲を具へ、祝宗をして之を上帝宗廟に薦めしめんと欲す。意ふに禮以て福を干（もと）むべきか、と。晏子對へて曰く、嬰之を聞く、古者先君の福を干むるや、政かならず民に合ひ、行かならず神に順に、宮室を節にして、敢て斬伐を大にせず、以て山林に偏ることなく、飲食を節にして、畋漁を多くすることなく、以て川澤に偏ることなし。祝宗の事を用ふるや、罪を辭し、敢て求むる所あらざるなり。是を以て神民ともに順にして、山川祿を納る。今、君の政は民に反し、行は神に悖る。宮室を大にして、斬伐を多くし、以て山林に偏り、飲食を羨し、畋漁を多くして、以て川澤に偏る。是を以て民神ともに怨み、山川祿を取む。司過罪を薦めて、祝宗福を祈る。意ふに逆ならんか、と。公曰く、寡人、夫子に非れば、此を聞く所なし。請ふ、心を革め行を易へん、と。是に于て公阜の遊を廢し、海食の獻を止め、斬伐するもの時を以てし、畋漁する者數あり、居處飲食、之を節して羨することなく、祝宗事を用ふるや、罪を辭して敢て求むる所あらしめず。故に隣國これを忌み、百姓これを親しむ。晏子没して後に衰ふ。（景公問于晏子曰、寡

人意氣衰、身病甚、今吾欲具璋璜犧牲、令祝宗薦之乎上帝宗廟、意者禮可以干福乎、晏子對曰、嬰聞之、古者先君之干福也、政必合乎民、行必順乎神、節宮室、不敢大斬伐、以無偏山林、節飲食、無多畋漁、以無偏川澤、祝宗用事、辭罪而不敢有所求也、是以神民俱順、而山川納祿、今君政反乎民、而行悖乎神、大宮室、多斬伐、以偏山林、羨飲食、多畋漁、以偏川澤、是以民神俱怨、而山川取祿、司過薦罪、而祝宗祈福、意者逆乎、公曰、寡人非夫子、無所聞此、請革心易行、于是廢公阜之遊、止海食之獻、斬伐者以時、畋漁者有數、居處飲食、節之勿羨、祝宗用事、辭罪而不敢有所求也、故隣國忌之、百姓親之、晏子没而後衰。『晏子春秋』卷三 内篇問上第三

ここで冒頭、「寡人意氣衰へ、身病むこと甚だし」と景公は晏子にうったえる。こうして、景公をして病氣の原因が「氣」の衰えにあると、いうことを明言させている。この「氣」の衰えによって生じた病いを、景公は礼をととのえて祝宗に祈らせることによって、「福」つまり病いの治癒を達成できるかどうかを、晏子に問うているのである。

晏子は古えの例を引いて、景公の企てがいかに当を失しているかを強調する。ここで主張されていることは、おおむね前の引用文でみてきたごとくである。しかし、ここではそれをさらに整理して述べている。つまり、祝宗の役わりは、もし君主に罪があれば、それを天に謝ることに尽きるといふ。したがって、「福」は、祝宗によっては得られないのであるといふことになる。そして「福」を求めらば、君主自身、政治を整え、民を安んじ、山林藪沢の資源を大

切に使い、あくまで君民一体となつてつつしむことが必要であるといふ。そうすれば、山川の神々が、祈らなくても自然に「福祿」をもたらしてくれるのであると、晏子は説く。

景公は今、「意氣衰え、身病むこと」が甚だしいのである。このこと自体、すでに「福」がもたらされていないのであると、晏子は言いたいのである。いふなれば、君主として自ら引きおこした国内の混乱の状況にたえられなくなっているものであり、このことが解決されないかぎり、病いは治らないというわけである。そこで、その国政を整えるために、晏子は景公に「心を革め、行いを易(か)へん」と、一般的な表現で、その方法を説いた。そうして、右の引用文の終りの方に、具体的にそれを記している。例えば、それは海産物の上納を少くし、森林の乱伐をつつし、狩猟や漁撈をひかえ目にし、宮殿も派手にせず、飲食物も質素にする。こうして人民をいたわり、資源を大切にす日々をつみ重ねることによって、人民および自然と調和することができるといふ。そこに生ずる心の安らぎこそが、晏子のいうところの「福」にあたるのであり、晏子の生存中は、景公はこの「福」を保ちえたのであるが、晏子の死後はそれもうまくいかなかったのであると、右の引用文ではいふ。

以上、ここに引いた二つの文章を関連させてみると、初めに引いた文章にのべられていた疥や瘧などという病いも、後の文章の「意氣衰へて身病む」ということと同列の状態であり、結局、それらはすべて気の病い^③のことであるといふことが推知されるであろう。これらは、君主の場合、現実の生活を、公私の両面にわたって充実調和させることによつて癒されるといふのが、その病気の治療の有

効な方法であるとされたのであった。祝宗の祈りによって天からもたらされるものではないのであると晏子は強調していた。いずれにしても、病いは「氣」のレベルのこととしてとらえる視点が、ここにはあったのであるが、このことを示す、以下のような『晏子春秋』の記述にふれておきたい。

○景公水を病む。臥すこと十數日。夜曹む。二日と闘ひて勝たず。晏子朝す。公曰く、夕者曹に二日と闘ひて、寡人勝たず。我れ其れ死せんか、と。晏子對へて曰はく、請ふ曹を占ふ者を召さん、と。閨を出でて、人をして車を以て曹を占ふ者を迎へしむ。至る。曰く、曷爲れぞ召さる、と。晏子曰く、夜者公二日を曹む。公と闘ひて勝たず。公曰く、寡人死せんか、と。故に君に請ふて曹を占ふ。是れ何の爲ぞや。占曹者曰く、請ふ其の書を反せんと。晏子曰く、書を反するなかれ。公病む所の者は陰なり。日は陽なり。一陰二陽に勝たず。故に病まさに已えんとす。是を以て對へよ、と。占曹者入る。公曰く、寡人二日と闘ひて勝たざるを曹む。寡人死せんか、と。占曹者對へて曰く、公の病む所は陰なり。日は陽なり。一陰二陽に勝たず。公の病まさに已えんとす、と。居ること三日、公の病大いに愈ゆ。(景公病水、臥十數日、夜曹、與二日、闘不勝、晏子朝、公曰、夕者曹與二日闘、而寡人不勝、我其死乎、晏子對曰、請召占曹者、出於閨使人以車迎占曹者、至、曰、曷爲見召、晏子曰、夜者公曹二日、與公闘不勝、公曰、寡人死乎、故請君占曹、是何爲也、占曹者曰、請反其書、晏子曰、毋反書、公所病者陰也、日者陽也、一陰不勝二陽、故病將已、以是對、占曹者入、公曰、寡人

晏子楹書攷 (久富木成大)

曹與二日闘而不勝、寡人死乎、占曹者對曰、公之所病陰也、日者陽也、一陰不勝二陽、公病將已、居三日、公病大愈。』『晏子春秋』卷六 内篇雜下第六)

景公が「水の病い」^④にかかり、十数日のあいだ床についていた。ある夜の夢に、景公が二つの太陽と戦って敗れるということがあった。この夢によって景公は自らの死を予感した。晏子は占夢者をよび、彼が王に会うまえに、彼に自分の夢解きの内容を伝えた。それは景公の水の病いを陰の「氣」によるものとし、夢の中の太陽を陽の「氣」となすものである。そうして、景公の夢の内容を、一つの陰氣が二つの陽氣に敗れると解し、景公の身体に病氣をもたらし、いる陰氣が退散する徴候であるとするものである。こうした晏子の夢解きの内容を、そのまま景公に伝えるよう指示した。その占夢者は晏子のいうとおりに従った。占夢者からの夢解きの内容を聞いた景公は、いだいていた死への驚怖から解放されたのがよかつたのであろうか。あるいは又、治る時がきていたのかも知れないが、『晏子春秋』では、あくまで前者によって、ということになるのであるが、三日後にこの病氣は治ってしまったと記されている。

『晏子春秋』のこの引用の部分では、病いを、その原因および治癒の過程のすべてにわたって、「氣」の問題としてとらえ、図式化してくれている。死の入口であると考えられる病氣が、こうして「氣」のレベルのこととしてとらえられている以上、死の世界も、その延長線上のものとしてとらえられているはずのものであるが、そのことについての明言は、『晏子春秋』のなかには見られない。

(四) 死と葬

すでに第一章において、死が人間にとって必ずしも避けるべきものではないということは、みてきたごとくである。同様のことを、また以下のようにもいう。

○景公酒を飲みて樂しむ。公曰く、古へよりして死なくんば、其の樂しみいかん、と。晏子對へて曰く、古へよりして死なくんば、則ち古への樂しみなり。君何ぞ得ん。昔、爽鳩氏、始めて此の地に居り、季荊これに因り、有逢伯陵これに因り、蒲姑氏これに因り、而る後に太公これに因る。古へ若し死なくんば、爽鳩氏の樂しみにして、君の願ふ所に非るなり、と。(景公飲酒樂、公曰、古而無死、其樂若何、晏子對曰、古而無死、則古之樂也、君何得焉、昔爽鳩氏、始居此地、季荊因之、有逢伯陵因之、蒲姑氏因之、而後太公因之、古若無死、爽鳩氏之樂、非君所願也。『晏子春秋』卷七 外篇第七)

これは晏子の死に対する考え方を述べているのである。あるいは又、心がまえの仕方とでもいった方がよいかも知れない。しかし、景公は、死がなければ、例えばこの酒による歡樂も、もっと増すであらうとして、この考えを晏子に支持してもらい、あわせて死への恐れをとりのぞいてもらうことを期待しているのである。ここにも明らかのように、晏子は、死があるからこそ今の樂しみを樂しめるのであって、死が無ければ、樂しみは古人に独占され、現代の人々は樂しみに与かることが難かしくなると、主張する。こうして、現代人に対する、あるいは又、現存の人間に対しての、死というものへの積極的な存在意義が説かれるのである。いふなれば、生者の現

実の生における幸福は、過去の人々の死によって与えられているという側面を否定できないということであろう。そのために死そのものが重視され、遺体に対しては、生体に対するのとは一線を厳しく画しての礼が施行されねばならないとされるのである。こうしたことについて、以下の記述に注目したい。

○景公の嬖妾嬰子死す。公これを守り、三日食はず、膚(はだへ)席につきて去らず。左右以て復すも、君聽くことなし。晏子入りて復して曰く、術客あり醫と俱にし、言ひて曰く、嬰子病死すと聞く。願はくは請ふ之を治せん、と。公喜び、遽かに起ちて曰く、病なほ爲すべきか。晏子曰く、客の道ふや、以て良醫と爲す。請ふ之を嘗試みよ。君請ふ屏潔沐浴飲食し、病者の宮を間にせよ。彼また將に鬼神の事あらんとす。公曰く、諾、と。しりぞきて沐浴す。晏子、棺人をして入りて斂めしむ。(景公之嬖妾嬰子死、公守之、三日不食、膚著于席不去、左右以復、而君無聽焉、晏子入復曰、有術客、與醫俱言曰、聞嬰子病死、願請治之、公喜遽起曰、病猶可爲乎、晏子曰、客之道也、以爲良醫也、請嘗試之、君請屏潔沐浴飲食、聞病者之宮、彼亦將有鬼神之事焉、公曰諾、屏而沐浴、晏子令棺人入斂。『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二)

景公の愛妾、嬰子が病死した。景公は悲しんで三日間食事もとらずに遺体に付きそっていた。臣下は入棺をすすめたが、景公はそれを拒んだので、臣下としても、それにまかせられなかつたのである。そこに嬰子がよばれた。彼は策を用いて景公を部屋から去らせ、その間に入棺をすませた。事態は以下のごとく進行する。

○已に斂めて、復して曰く、醫、病を治する能はずして、已に斂む。敢て以聞せずんばあらず、と。公、色を作して説ばずして曰く、夫子醫を以て寡人に命じて視しめず、將に斂めんとして以聞せず。吾の君たる、名のみ、と。晏子曰く、君獨り死者の以て生かすべからざるを知らざるか。嬰これを聞く。君正しくして臣従ふ。之を順と謂ふ。君僻にして臣従ふ。これを逆と謂ふ、と。今、君順によらずして僻を行ひ、邪に従ふ者は邇（ちか）づき、害に導く者は遠ざかる。諛諛萌通して、賢良廢滅す。是を以て諛諛、間に繁く、邪行國に交る。昔、吾が先君桓公、管仲を用ひて霸たり、堅刁を嬖して滅ぶ。（已斂而復曰、醫不能治病、已斂矣、不敢不以聞、公作色不説曰、夫子以醫命寡人、而不使視、將斂而不以聞、吾之爲君、名而已矣、晏子曰、君獨不知死者之不可以生邪、嬰聞之、君正臣從、謂之順、君僻臣從、謂之逆、今君不道順而行僻、從邪者邇、導害者遠、諛諛萌通、而賢良廢滅、是以諛諛繁於間、邪行交於國也、昔吾先君桓公用管仲而霸、嬖乎堅刁而滅。』『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二）

当然のことながら景公は怒った。君主としての立場を無視されたと思つたからである。しかし晏子は、これを機に、景公の治政を批判する。今、嬰子への執着のあまり、入棺もされずに三日も過ごされてゐる景公の周囲の状況には、逆邪のふんいきが満ちてゐる、と晏子はいふ。これは、一たびは管仲を用ひて霸者となりながらも、晩年は堅刁を用ひて乱政を招いた、あの桓公の晩年の状況に似てゐると述べる。そうして、更にいふ。

○今、君、賢人の禮に薄くして、嬖妾の哀に厚くす。且つ古への

晏子楹書攷 (久富木成大)

聖王は、私を畜ふて行を傷らず、死を斂めて愛を失はず、死を送りて哀を失はず。行ひ傷るときは則ち己れを溺らし、愛失ふときは則ち生を傷ひ、哀失ふときは則ち性を害す。是故に聖王は之を節す。則ち斂を畢へて生事を留めず、棺槨衣衾、以て生養を害せず、哭泣哀に處して、以て生道を害せず。（今君薄於賢人之禮、而厚嬖妾之哀、且古之聖王、畜私不傷行、斂死不失愛、送死不失哀、行傷則溺己、愛失則傷生、哀失則害性、是故聖王節之也、即畢斂不留生事、棺槨衣衾、不以害生養、哭泣處哀、不以害生道。』『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二）

古之の聖王は、葬儀をきちんと執り行つて死者を葬り、それによつて愛憎の念を断ちきつたのである。そうして、その葬礼もほどよい出費によつて行ひ、残された者の負担にならないようにしたのであつた、と晏子はいふ。ところが、景公の愛妾、嬰子の死への対応はどう評価されるであらうか。

○今、尸を朽ちしめて以て生を留め、愛を廣くして以て行を傷ひ、哀を修めて以て性を害するは、君の失なり。故に諸侯の賓客、吾國に入るを慙ち、本朝の臣、其の職を守るを慙づ。君の行いを崇べば、以て民を導くべからず、君の欲をほしいままにすれば、以て國を持すべからず。且つ嬰これを聞く、朽ちて而して斂めざる、これを修尸と謂ふ。臭して而して収めざる、之を陳腐と謂ふ、と。明王の性に反し、百姓の誹を行ひ、而して嬖妾を修尸に内（い）る。此を之れ不可と爲す、と。公曰く、寡人識らず。請ふ、夫子に因りて之を爲さん、と。（今朽尸以留生、廣愛以傷行、修哀以害性、君之失矣、故諸侯之賓客、慙入吾國、

本朝之臣、慙守其職、崇君之行、不可以導民、從君之欲、不可以持國、且嬰聞之、朽而不斂、謂之僂尸、臭而不収、謂之陳齒、反明王之性、行百姓之誹、而内嬖妾於僂齒、此之爲不可、公曰、寡人不識、請因夫子、而爲之』『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二

今、景公は嬰子の尸体を朽ちるにまかせながらも、まだ生時の愛情を断ちきれず、悲哀の念にとらわれて、自らの健康を大事にすることを忘れていた。これは愛欲に執着して、君主としての義務を怠っている、恥ずべき状態である。また、昔からこういわれている。朽ちていく遺体を葬らないのは、「僂尸」、つまり刑罰の野ざらしの死体といい、悪臭を放つまで葬られないままの亡骸を、「陳齒」、すなわち腐りきった古い死体という。と。今、景公は愛妾を「僂齒」にして、国の内外のそしりにも耳をかさず、聖王の教えに遠ざかること甚だしい、と晏子はのべている。

晏子のいうところは説得的であり、さすがの景公もおれて、自らの行為を非として反省した。嬰子を葬ったことはいうまでもないであろう。『晏子春秋』ののべる、景公をめぐるこの話題をとおして、我々は葬礼の持つ社会的な意義の重大さということについて知らなければならぬ。死は一人のものであるが、その一人を葬るための葬礼の占める位置は、大きくて重い。葬礼をめぐる一連の事象の持つ影響力が、どのくらいにはかり知れないものであったかを、我々は以下の記述によって知ることができるであろう。

『晏子春秋』においては、景公が宮殿をみだりに拡張し、その結果、人民の墓域にまで殿舎が建てられるというようなことがあった

ことを記している。こうしたことは、景公治下の齊にあつては、珍しいことではなかったのかも知れない。『晏子春秋』では、そのための、二つの記述が残されている。このこと自体、いろいろな考えがあらうが、ここではそれについては問題にしない。⁵⁾

○景公、路寝の臺を成す。逢於何、喪に遭ふ。晏子に途に遇ひ、馬前に再拜す。晏子車を下り、之を挹して曰く、子何を以て嬰に命ずるか、と。對へて曰く、於何の母死す。兆、路寝の臺の牖下に在り。願はくは命を請ひて骨を合はせん、と。曰く、あ難いかな。然りと雖も將に子がために之を復さんとす。たまたま爲に得ずんば、子將に若何せんとす、と。對へて曰く、夫の君子は則ち以(な)すことあらん。わが儕小人の如きは、われ將に左手に格を擁し、右手に心を梱き、立餓枯槁して死し、以て四方の士に告げて曰はん、於何は其の母を葬ること能はざる者なり、と。晏子曰く、諾、と。遂に入りて公に見えて曰く、逢於何といふ者あり、母死す。兆、路寝に在り。當に之を如何にすべき。合骨せんと願ひ請ふ、と。公、色をなして悦ばず、曰く、古へより今に及ぶまで、子また嘗て人主の宮に葬らんと請ふ者を聞けるか、と。晏子對へて曰く、古への人君は、其の宮室節にして、生民の居を侵さず。臺榭儉にして、死人の墓を殘はず。故に未だ嘗てこれを人主の宮に葬らんと請ふ者を聞かざるなり。今、君侈りて宮室をつくり、人の居を奪ひ、廣く臺榭をつくり、人の墓を殘ふ。是れ生者は愁憂して、安處することを得ず、死者は離易して、骨を合することを得ず、豊樂侈遊、生死に兼徹す。人君の行いに非るなり。欲を遂げ求を滿して、

細民を顧みざるは、存の道に非ず。且つ嬰これを聞く、生者安きを得ず、之をなづけて、憂を蓄ふと曰ふ、死者葬るを得ず、之をなづけて哀を蓄ふと曰ふ、と。憂を蓄ふる者は怨まれ、哀を蓄ふる者は危し。君、之を許すに如かず、と。公曰く、諾、と。晏子出ず、梁丘據曰く、昔より今に及ぶまで、未だ嘗て公宮に葬むるを求むる者を聞かざるなり。若何んぞ之を許せる、と。公曰く、人の居を削り、人の墓を殘ひ、人の喪を凌ぎ、其の葬を禁ず。是れ生者に於て施すことなく、死者に於て禮なきなり。詩に云ふ、穀きては則ち室を異にし、死しては則ち穴を同じくす、と。吾あへて許さざらんや、と。逢於何つひに其の母を路寢の牖下に葬る。哀を解き絰を去り、布衣膝履、玄冠此武、踊して哭せず、躡して拜せず、已にして乃ち涕洟して去る。

（景公成路寢之臺、逢於何遭喪、遇晏子於途、再拜乎馬前、晏子下車、挹之曰、子何以命嬰也、對曰、於何之母死、兆在路寢之臺牖下、願請命合骨、曰、嘻、難哉、雖然將爲子復之、適爲不得、子將若何、對曰、夫君子則有以、如我儕小人、吾將左手擁格、右手梱心、立餓枯槁而死、以告四方之士、曰、於何不能葬其母者也、晏子曰、諾、遂入見公曰、有逢於何者、母死、兆在路寢、當如之何、願請合骨、公作色不悅、曰、古之及今、子亦嘗聞諸葬人主之宮者乎、晏子對曰、古之人君、其宮室節、不侵生民之居、臺榭儉、不殘死人之墓、故未嘗聞諸葬人主之宮者也、今君侈爲宮室、奪人之居、廣爲臺榭、殘人之墓、是生者愁憂、不得安處、死者離易、不得合骨、豐樂侈遊、兼傲生死、非人君之行也、遂欲滿求、不顧細民、非存之道、且嬰聞之、生

晏子楹書攷

（久富木成大）

者不得安、命之曰蓄憂、死者不得葬、命之曰蓄哀、蓄憂者怨、蓄哀者危、君不如許之、公曰、諾、晏子出、梁丘據曰、自昔及今、未嘗聞求葬公宮者也、若何許之、公曰、削人之居、殘人之墓、凌人之喪、而禁其葬、是於生者無施、於死者無禮、詩云、穀則異室、死則同穴、吾敢不許乎、逢於何、遂葬其母路寢之牖下、解衰去絰、布衣膝履、玄冠此武、踊而不哭、躡而不拜、已乃涕洟而去。『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二）

また、つぎのようにもいう。

○景公路寢の宮に宿す。夜分にして、西方に男子の哭する者あるを聞く。公これを悲しみ、明日朝して晏子に問ひて曰く、寡人夜者、西方に男子の哭する者あるを聞く。聲はなはだ哀しく、氣はなはだ悲しむ。これなんする者ぞ。寡人これを哀しむ、と。晏子對へて曰く、西郭に徒居する布衣の士、盆成适なり。父の孝子、兄の順弟なり。また嘗て孔子の門人たり。今その母不幸にして死し、柩未だ葬らず。家貧に身老い子穉のみ。力合耐すること能はざるを恐る。是を以て悲しむなり、と。公曰く、子寡人がために之を弔し、因つて其の偏耐いづれの所に在るかを問へ、と。晏子命を奉じ、往きて弔す。而して偏の在る所を問ふ。盆成适再拜稽首して起たず。曰く、偏耐路寢に寄す。地下の臣となり、札を擁して筆を摻り、宮殿中右陞の下に給事することを得たり。某日を以て送らんことを願ふも、未だ君の意を得ざるなり。窮困して以て之を圖ることなし。布唇枯舌、焦心熱中す。今、君辱とせずして之に臨む。願はくは君これを圖れ、と。晏子曰く、然り。此れ人の甚だ重き者なり。而も恐ら

くは君許さざらん、と。盆成适、蹶然として曰く、凡て君に在るのみ。且つ臣これを聞く、越王勇を好みて、其の民死を輕んじ、楚の靈王細腰を好みて、其の朝餓死の人多し。子胥は其の君に忠なり。故に天下皆得て以て子となさんことを願ふ、と。今人の子臣となりて、其の親戚を離散せば、孝ならんや。以て臣となすに足らんや。若し此にして耐することを得ば、是れ臣を生かして死母を安んずるなり。若し此にして得ずんば、則ち臣請ふ尸車を輓きて、之を國門の外、宇溜の下に寄せん。身あへて飲食せず、輶を擁し輅を執り、木乾鳥栖し、肉を袒し骸を暴し、以て君の之を愍むを望まん。賤臣愚なりと雖も、竊かに意ふ、明君の哀れみて忍びざらんことを、と。晏子入りて公に復す。公忿然として色を作して怒りて曰く、子何ぞ必らずしもこの言を患へて、而して寡人に教ふるや、と。晏子對へて曰く、嬰これを聞く、忠は危を避けず、愛は惡言なし、と。且つ嬰もとより以て之を難んず。今君營處して游觀を爲し、既に人の有を奪ひ、又その葬を禁ぜば、仁に非るなり。心を肆にし聽を傲らし、民の憂ひを恤まざるは、義に非るなり。いかんぞ聽くこと勿らん、と。因りて盆成适の辭を道ふ。公喟然として太息して曰く、悲しいかな。子また言ふこと勿れ、と。迺ち男子の袒免し、女子の髮笄する者百數を以て爲に凶門を開きて、以て盆成适を迎へしむ。适衰絰を脱し、條纓を冠し、縁を墨して以て公に見ゆ。公曰く、吾これを聞く、五子あるも隅に滿たしめず。一子あらば朝に滿たすべし、と。迺ち子に非ずや、と。盆成适是に于て事に臨むに敢て哭せず、事を奉ずるに禮を以てし、畢

りて門を出でて、然る後に聲を擧ぐ。(景公宿於路寢之宮、夜分聞西方有男子哭者、公悲之、明日朝問於晏子曰、寡人夜者聞西方有男子哭者、聲甚哀、氣甚悲、是奚爲者也、寡人哀之、晏子對曰、西郭徒居布衣之士盆成适也、父之孝子、兄之順弟也、又嘗爲孔子門人、今其母不幸而死、耐柩未葬、家貧身老子孺、恐力不能合耐、是以悲也、公曰、子爲寡人弔之、因問其偏耐何所在、晏子奉命往弔、而問偏之所在、盆成适再拜稽首不起、曰、偏耐寄于路寢、得爲地下之臣擁札摻筆、給事宮殿中右陛之下、願以某日送、未得君之意也、窮困無以圖之、布昏枯舌、焦心熱中、今君不辱而臨之、願君圖之、晏子曰、然此人之甚重者也、而恐君不許也、盆成适蹶然曰、凡在君耳、且臣聞之、越王好勇、其民輕死、楚靈王好細腰、其朝多餓死人、子胥忠其君、故天下皆願得爲子、今爲人子臣、而離散其親戚、孝乎哉、足以爲臣乎、若此而得耐、是生臣安死母也、若此而不得、則臣請輓尸車、而寄之於國門外、宇溜之下、身不敢飲食、擁輶執輅、木乾鳥栖、袒肉暴骸、以望君愍之、賤臣雖愚、竊意明君哀而不忍也、晏子入復乎公、公忿然作色而怒曰、子何必患若言、而教寡人乎、晏子對曰、嬰聞之、忠不避危、愛無惡言、且嬰固以難之矣、今君營處爲游觀、既奪人有、又禁其葬、非仁也、肆心傲聽、不恤民憂、非義也、若何勿聽、因道盆成适之辭、公喟然太息曰、悲乎哉、子勿復言、迺使男子袒免、女子髮笄者、以百數、爲開凶門、以迎盆成适、适脫衰絰、冠條纓、墨縁以見乎公、公曰、吾聞之、五子不滿隅、一子可滿朝、非迺子耶、盆成适于是臨事不敢哭、奉事以禮、畢出門、然後擧聲焉。』『晏子春秋』卷七 外篇第七)

儻小人と自称する逢於何と、布衣の士、益成适という、いずれも身分は高くない二人が、ここではほぼ同じ立場の下におかれている。景公の宮殿のそばに台榭が建てられたとき、逢於何の父の墓地は、その用地として没収された。ここでいうところの「路寢の台の牖下」が、その墓のあった、より詳しい場所である。益成适の父の墓は、宮殿の「右階の下」、つまり正殿にかかる右側の階段の下にあったのである。

逢於何の母が亡くなった。時の前後は明らかにしえないが、益成适の母も死亡した。彼らは、それぞれ亡母を、亡父の墓地に合葬しようとしたが、そのことを逢於何の場合、「合骨」といい、益成适の方は「合柩」といいあらわしている。両方とも、そのことの実現には大変な困難が予想され、ほとんど実現することは断念しなければならぬかのごとくであった。それは、君主の宮殿内に、庶民がその親を葬るといふ大それたことになるからである。しかしながら二人とも、ともに晏子にそのことを伝え、景公の許可を得ようとした。

晏子から逢於何の申し出を聞いて、景公は、例によって「色をなして悦ばず」、そのことを許さなかった。しかし晏子は以下のように説いた。宮殿を派手に増築して、人民の墓地をとりこわすような行為は、「生者は愁憂して安処することを得ず、死者は離易して、骨を合することを得ない」ことにあたる。これは生者の憂えを蓄えるだけでなく、その上に、死者を葬ることのできない哀しみを蓄えることにもなる。世に「憂を蓄える者は怨まれ、哀みを蓄える者は危い」といわれている。君主たるもの、心せねばならない、と。

晏子の説得の要点は、国内の人民の謗怨の積み重なり、景公は

耐えられないであろうという、忠告にある。景公も晏子のいうところ深く同意したものと見てよい。宮殿敷地内への合骨に強く反対する臣下もいたのであるが、景公自ら『詩経』の「穀（い）きては則ち室を異にし、死しては則ち穴を同じくす」という句を引いて、かえってそれを説得し、さらに合骨を許すことが、生者の孝に報いることであり、死者に対する礼にもかなうことでもあるのであると、いいきるまでに至ったのである。

益成适の場合は、かつて孔子の弟子であったことがあると述べられている。益成适はいう。父の墓地が宮殿用地として没収されたことによつて、「父は地下で臣下となり、札を擁し、筆を摻（と）り、宮殿中右階の下に給事することを得たり」と述べ、死後も地下で使命を果たしている亡父のところへ、亡母をおくりたいと。さらに、こうした自らの立場が「孝」のためであることを、「今、人の子、臣となりて、其の親戚を離散せば、孝ならんや」という表現で明らかにしている。益成适のいう「孝」は、合柩することによつて、地下の父母を離散させないようにすることまでを、その完結点として考えているのである。益成适の立場を支持する晏子は、「今、君營処して遊観をなし、すでに人の有を奪い、又その葬を禁ぜば、仁にも非ざるなり。心をほしのままにし聴をおごらし、民の憂を恤まざるは、義に非ざるなり。若荷ぞ聴くことなからん」と述べ、仁・義という道徳に照らしても益成适の願いをしりぞけるべきでないことを力説する。

二つの挿話を通じて、葬ということの持つ、大きな力に我々は思いをいたされなければならぬ。逢於何の願いや益成适の主張をぬ

きにしても、葬それ自体の持つ社会的な力の大きさは、君権をもし
のぐものであるということがこれまでの記述によってわかるであろ
う。それは人間の愛憎を超えるのみでなく、世俗の最高の権力をも
左右する力を持つている。それはしかし、葬という現実の行為のみ
によってそうなっているのではない。それは、葬礼が死の世界に連
なること、あるいはそれを媒介することによって、そうした力を発
揮しているということが考えられるのである。合骨^⑧といひ、合柩と
いひのは、死後の世界での夫婦生活を保障することである。これを
一般化していえば、家族としての共同体性を、永遠に保障するとい
うことを示す、現実を超えた大きな力がそこにはあるのである。死
が、あるいはそれに連なる葬礼が、現実の社会生活に大きな力を発
揮するのは、実はそれはこのことのためであつたのであると、みて
よいであらう。

三 国の興亡と礼

山野や台榭等での遊びにおいて、景公がよく「死」ということに
直面したのは、すでに第一章においてみてきたごとくである。しか
し、今までに検討してきたのは、人の死亡についてであつた。ここ
では遊びをなかだちとして生ずる、景公にとつて、その生命と等価
ともとられているはずの、斉国の運命、あるいは国家の興亡という
ことについてみていきたい。これらは、あるいみで国家というもの
の、いわば死亡というようなことであり、このことについて、第一
章以来のことに関連させながら考察をつづけていきたいと思う。

○景公まさに溜上に觀(あそ)ばんとす。晏子と問立す。公喟然
として歎じて曰く、嗚呼、國をして長く保ちて子孫に傳ふべか
らしめば、あに樂しからずや、と。晏子對へて曰く、嬰聞く、
明王は徒らに立たず、百姓は虚しく至らず、と。今、君政を以
て國を亂り、行を以て民を棄つること久し。而るに聲これを保
たんと欲す。また難からずや。嬰これを聞く、能く長く國を保
つ者は、能く善を終る者なり。諸侯並び立ち、能く善を終る者
は長となり、列士並び學び、能く善を終る者は師となる、と。
むかし先君桓公、其のまさに賢に任じて徳を贊くるの時、亡國
恃んで以て存し、危國仰ぎて以て安し。是を以て民その政を樂
しみ、世その徳を高しとし、遠きに行き、暴を征し、勞するも
の疾まず。海内を驅りて天子に朝せしめて、諸侯怨みず。是の
時に當りて、盛君の行いもこれより進むこと能はず。其の卒に
して衰ふるに及びて、徳に怠りて樂しみに并し、身は婦侍に溺
れて、謀は豎刁に因る。是を以て民その政に苦しみて、世その
行いをそしる。故に身胡宮に死して擧せず、蟲出で収められず。
是の時に當りて、桀紂の卒もこれより惡しきこと能はず。詩に
曰く、初めあらざる靡し、克く終りある鮮し、と。善を終る能
はざる者は、其の君を遂げしめず。今、君、民に臨むこと寇讎
の若く、善を見ては熱を避くるが若く、政を亂して賢を危くし、
必らず衆に逆らひ、欲を民に肆にして、下を誅虐す。恐らくは
身に及ばん。嬰年老いて、君の使いを待つこと能はず。行革む
ること能はずんば、則ち節を持って以て世を没せんのみ、と。
(景公將觀于溜上、與晏子問立、公喟然歎曰、嗚呼、使國可長

保而傳于子孫、豈不樂哉、晏子對曰、嬰聞、明王不徒立、百姓不虛至、今君以政亂國、以行棄民久矣、而聲欲保之、不亦難乎、嬰聞之、能長保國者、能終善者也、諸侯竝立、能終善者爲長、列士竝學、能終善者爲師、昔先君桓公、其方任賢而贊德之時、亡國恃以存、危國仰以安、是以民樂其政、而世高其德、行遠征暴、勞者不疾、驅海內使朝天子、而諸侯不怨、當是時、盛君之行、不能進焉、及其卒而衰、怠于德、而并于樂、身溺于婦侍、而謀因堅刁、是以民苦其政、而世非其行、故身死乎胡宮而不舉、蟲出而不収、當是時也、桀紂之卒、不能惡焉、詩曰、靡不有初、鮮克有終、不能終善者、不遂其君、今君臨民、若寇讎、見善若避熱、亂政而危賢、必逆于衆、肆欲于民、而誅虐于下、恐及于身、嬰之年老、不能待于君使矣、行不能革、則持節以沒世耳

『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一

ここでとりあげられている「觀(あそび)」^⑩は、溜水の上(ほとり)においてなされている。川の流れが、景公の想念をうごかしたのであるうか。彼は「国を長く保って、代々子孫に伝えつづけることができれば、どんなによいであろうか」という。景公の心には、すでに亡国のおそれが兆していたのである。

景公は、晏子に指摘されるまでもなく、自らの行いについては、心に恥じるころがあつたはずである。「身、朝宮に死して挙せず、虫出でて収められず」という、「桀紂の死もこれより悪しきこと能はず」とされるような悲惨な死を招いた先君桓公にも比せられる悪政を、景公は現に行いつつあつたのである。このことをあからさまに晏子に、景公は指摘されている。国を長く保ち、子孫に伝えること

の出来そうにない自分の立場を、このたびの遊びにおいて、景公はさとつた。

また、景公は、遊びの一つと考えられるところの、台榭からの展望を楽しんでいるとき、以下のようにも、国の亡ぶことに思いをいたした。

○景公、晏子と寝に登りて國を望む。公愀然として歎じて曰く、後嗣をして世世に此を有たしめば、豈に不可ならんや、と。晏子曰く、臣聞く、明君は必ず務めて其の治を正し、以て民を利するを事とし、然る後に子孫これを享く。詩に云ふ、武王あに事とせざらんや。厥の孫謀を貽し、以て子を燕翼す、と。今、君佚怠に處り、逆政民を害すること日あり。而るになほこの言を出す。また甚だしからずや、と。(景公與晏子登寝而望國、公愀然而歎曰、使後嗣世世有此、豈不可哉、晏子曰、臣聞、明君必務正其治、以事利民、然後子孫享之、詩云、武王豈不事、貽厥孫謀、以燕翼子、今君處子、今君處佚怠、逆政害民有日矣、而猶出若言、不亦甚乎) 『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二

ここに「寝に登る」という。これは路寝、つまり宮殿の正殿のそばに設けられた台榭に登ることである。景公はこうした台に登って眺望を楽しもうとした。しかし景公は「愀然として歎じて」、「齊國を子孫に代々伝えたいのであるが、駄目であろうか」と晏子にたずねた。しかし、そう問うている景公自身、その答えはわかっているのである。問うその声を、ここで「愀然として歎じて」と記しているように、景公は前途を悲観して、泣き声になっているのである。それに応じて、『詩経』を引用して答える晏子のことばは冷たい。

公の現在の行為の数々は、子孫を末代まで安らかに羽翼するに足りないという。

景公にとつても、齊の亡国ということは避けられないこととして、心の中にすでに形をととのえていたのである。遊びという時間と空間とが、公にその憂心を露わにさせたのであるが、では齊國は、まさに景公の思うように、あるいは晏子のいうとおりに、危ういのであろうか。景公は、齊の王室にとつて代るものの影におびえていたのであるが、その影の実体はどのようなものかを、まず明らかにしなければならぬ。

○公曰く、然らば則ち後世たれか將に齊國を把らんとする、と。

對へて曰く、服牛死して夫婦笑ふ。骨肉の親に非るなり。其の利の大なるためなり。齊國を把る者を知らんと欲せば、則ち其れ之を利する者か。(公曰、然則後世孰將把齊國、對曰、服牛死、夫婦笑、非骨肉之親也、爲其利之大也、欲知把齊國者、則其利之者邪) 『晏子春秋』卷二 内篇諫下第二)

晏子は、それは「之を利する者」、つまり齊國民に利益をもたらす者が、将来の齊國の君主になる者であるという。晏子はここではその誰であるかはいつていない。現在の齊の王室の主、つまり景公の子孫でないことは、確かであると晏子はいふ。

○今、君は宮室を大にし、臺榭を美にし、以て饑渴寒暑を辟け、禍を畏れて鬼神を敬す。君の善は以て身を没するに足るも、以て子孫に及ぼすに足らず、と。(今君大宮室、美臺榭、以辟饑渴寒暑、畏禍敬鬼神、君之善足以没身、不足以及子孫矣) 『晏子春秋』卷四 内篇問下第四)

景公は、自身の一代はなんとか全うできるが、子孫にまではその恩沢を及ぼすことは不可能であると、晏子はいふ。齊の王室の政權は、おそかれ早かれ、他姓の家にとつて代られるものと見ているのである。では、その家はこの家であらうか。晉に招かれた晏子は、そのことについて、宰相の叔向に以下のごとく述べている。

○晏子晉に聘す。叔向これに従ひて宴し、相與に語る。叔向曰く、齊は其れいかん、と。對へて曰く、此れ季世なり。吾れ知らず。齊はそれ田氏と爲らんか、と。叔向曰く、何の謂ぞや、と。晏子曰く、公その民を棄てて田氏に歸すればなり。齊はもと四量なり。豆區釜鐘、四升を豆と爲し、おのおの其の四をもちひて以て釜に登せ、釜十なれば則ち鐘なり。田氏三量あり、皆一を登す。鐘は乃ち巨なり。家量を以て貸し、公量を以て之を取む。山木市に如きて、山より加はらず。魚鹽蜃蛤は、海より加はらず。民その力を參にして、二は公に入り、而して其の一を衣食す。公の積朽蠹して、老少凍餒し、國都の市、履は賤しくして踊は貴し。民人痛疾して、之を煨休することあり。むかし殷人、誅殺當らず、民を僇すること時なし。文王殷の衆を慈惠し、無主を収郵す。是の故に天下これに歸す。私與なし。維だ德に之れ授く。今公驕暴にして、田氏は慈惠あり。其の之を愛すること父母の如く、之に歸すること流水の如し。民を獲ることなからんとするも、將た焉くに避けん。箕伯、直柄、虞遂、伯戲、其れ胡公太姬を相けて、已に齊に在り。(晏子聘于晉、叔向從之宴、相與語、叔向曰、齊其何如、對曰、此季世也、吾弗知、齊其爲田氏乎、叔向曰、何謂也、晏子曰、公棄其民而歸于田氏、

齊舊四量、豆區釜鐘、四升爲豆、各自其四、以登於釜、釜十則鍾、田氏三量、皆登一焉、鍾乃巨矣、以家量貸、以公量取之、山木如市、弗加于山、魚鹽蜃蛤、弗加于海、民參其力、二人于公、而衣食其一、公積朽蠹、而老少凍餒、國都之市、履賤而踊貴、民人痛疾、或煥休之、昔者殷人誅殺不當、僂民無時、文王慈惠殷衆、取卹無主、是故天下歸之、無私與、維德之授、今公室驕暴、而田氏慈惠、其愛之如父母、而歸之如流水、無獲民將焉避、箕伯直柄虞遂伯戲、其相胡公太姬、已在齊矣。『晏子春秋』卷四 内篇問下第四)

冒頭、晏子は、「齊は末世であり、田氏がやがて齊の君主となるであらう」という。そうして、「公室は横暴であるが、田氏はやさしい。人民は田氏を父母のように愛し、流水が高いところから低いところへ流れるように、自然に田氏になつていく。田氏が避けようとして、田氏の人気は高まるばかりだ」と、とむすび、その間にこの理由を詳しく述べている。このように、齊は完全に田氏のものにならうとしていたのである。齊の公室は亡びようとしているのである。こうした情勢が、ひしひしと景公の心身をさいなみ、先に引いた文章にも明らかのように、景公の歎きをさそつた。景公の遊びは、この現実には景公を直面させるものであった。

景公は、しかし、絶対に子孫に家をゆずり続けることはできないのであろうか。理屈の上からは、それは不可能なことではない。景公が田氏以上の「利」を国民に与えることができればよいのである。そうすることによって、景公の子孫は、永久に齊の君主として君臨することができるはずのものである。この間の事情を知るために、

煩をいとわず、ここにもう一度このことに関連しての、遊びに際してかわされた景公と晏子とのやりとりをみていこう。なお、この遊びは、曲演という川のほとりにおいてなされたものである。

○景公、晏子と曲演の上に立ち、齊國を望見し、晏子に問ひて曰く、後世孰か將に齊國を踐有せんものとする者ぞ、と。晏子對へて曰く、賤臣の敢て議する所に非ざるなり、と。公曰く、胡ぞ必ずしも然らんや。得る者失ふことなきときは、則ち虞夏常に存せん、と。晏子對へて曰く、臣聞く、不足を見て以て之を知る者は、智なり。先づ言いて而る後に當る者は、惠なり、と。夫れ智と惠とは、君子の事なり。臣奚ぞ以て之を知るに足らんや。然りと雖も臣請ふ其の爲政を陳べん。君強く臣弱きは政の本なり。君唱へ臣和するは、教への隆なり。刑罰君に在るは、民の紀なり。今それ田無宇二世、國に功あり。而して利取すれば寡に分つ。公室は之を兼ね。國權これを専らにし、君臣施を易ふ、而して衰ふることなからんや。嬰これを聞く、臣富めば主亡ぶ、と。是に由りて之を觀れば、其れ無宇の後、幾もなくして齊國は田氏の國ならん。嬰老いて公の事を待つこと能はず。公もし世に即かば、政公室に在らじ、と。然らば則ち奈何にせん、と。晏子對へて曰く、維だ禮以て之を已むべし。其れ禮にありては、家施國に及ばず、民解らず、貨移らず、工賈變せず、士濫せず、官諂せず、大夫公利を収めず、と。公曰く、善し、今、禮の以て國を爲むべきを知る、と。對へて曰く、禮の以て國を爲むべきこと久し。天地と並び立つ。君令し臣忠に、父慈に子孝に、兄愛に弟敬に、夫和し妻柔に、姑慈に婦聽するは禮

の經なり。君令して違はず、臣忠にして二ならず、父慈にして教へ、子孝にして箴め、兄愛にして友に、弟敬にして順に、夫和して義に、妻柔にして貞に、姑慈にして従に、婦聽して婉なるは、禮の質なり、と。公曰く、善いかな。寡人迺ち今禮の尚きを知る、と。晏子曰く、夫れ禮は、先王の天下に臨む所以なり。以て其の民を爲む。是の故に之を尚ぶ、と。(景公與晏子立曲潢之上、望見齊國、問晏子曰、後世孰將踐有齊國者乎、晏子對曰、非賤臣之所敢議也、公曰、胡必然也、得者無失、則虞夏常存矣、晏子對曰、臣聞、見不足、以知之者智也、先言而後當者惠也、夫智與惠、君子之事、臣奚足以知之乎、雖然臣請陳其爲政、君強臣弱、政之本也、君唱臣和、教之隆也、刑罰在君、民之紀也、今夫田無宇二世有功于國、而利取分寡、公室兼之、國權專之、君臣易施、而無衰乎、嬰聞之、臣富主亡、由是觀之、其無宇之後、無幾齊國田氏之國也、嬰老不能待公之事、公若即世、政不在公室、公曰、然則奈何、晏子對曰、維禮可以已之、其在禮也、家施不及國、民不懈、貨不移、工費不變、士不濫、官不諂、大夫不取公利、公曰、善、今知禮之可以爲國也、對曰、禮之可以爲國也久矣、與天地並立、君令臣忠、父慈子孝、兄愛弟敬、夫和妻柔、姑慈婦聽、禮之經也、君令而不違、臣忠而不二、父慈而教、子孝而箴、兄愛而友、弟敬而順、夫和而義、妻柔而貞、姑慈而從、婦聽而婉、禮之質也、公曰善哉、寡人迺今知禮之尚也、晏子曰、夫禮先王之所以臨天下也、以爲其民、是故尚之』『晏子春秋』卷七 外篇第七)

齊王室の延命策は、理論上は無数にあるわけであるが、それを一

般化していつているのが、ここにいう札の「経」と「質」とである。この札の「経」と「質」とを、景公が実行できたならば、景公自身、齊王室の永遠性を確信することができたにちがいない。この札の「経」と「質」との実行ということについては、前述のごとく、景公に関するかぎり絶望的であったのである。景公が遊びに際して見た、齊公室の滅亡のまぼろしは、景公の死後、現実のものとなった。

○景公没す。田氏君荼を殺して陽生を立て、陽生を殺して簡公を立て、簡公を殺して齊國を取る。(景公没、田氏殺君荼立陽生、殺陽生立簡公、殺簡公而取齊國』『晏子春秋』卷一 内篇諫上 第一)

景公が遊びに際して、心にいだき、「愀然として歎じた、あの齊の亡国は、こうして現実のものとなったのである。景公の遊びは、齊のこの亡国のまぼろしに景公を直面させたのである。

おわりに

齊の景公の遊びは、それを媒介として、死や、国家の滅亡へと、最も悲惨な方向へと、その想いを導く一面のあることを、『晏子春秋』のなかでは描き出している。したがって、遊びは、齊の景公にとつては、例えば『莊子』逍遙遊篇における「遊」が、なにものにもとらわれることのない生活や境地をいうとされるのと、まさに対極をなしているとみられるであろう。景公のような、現実への密着しての思いは、物そのものの姿を直視することに始まる。そうしてその思いはすでに見てきたように、悲傷感なしにはおさまることはな

かった。そのこの理由は、『晏子春秋』のつぎのような記述に求めることができるであろう。

○樂しむ淫すれば、則ち衰ふ、と。(樂淫則衰)『晏子春秋』卷一 内篇諫上第一)

○夫れ盛の衰あり、生の死あるは、天の分なり。物必ず至るあり、事常に然るあるは、古之の道なり。(夫盛之有衰、生之有死、天之分也、物有必至、事有常然、古之道也)『晏子春秋』卷七 外篇第七)

生命をはじめとして、それらを一般化していつていると見なされるところの、現実の物や事に注目し、それに執着するかぎりにおいて、それは、ここにいうように、それらの常として、「盛」のみを楽しむことはできない。必ず、それを樂しめば、あるいはそれに淫するようないふことがあれば、それだけ早く、確実に「衰」を経験しなければならぬ。そのことは、個人の意志をこえた、天の定めた道に外ならないのであると、右の引用文においてはいう。

遊びが一面において、快樂を得る一つの機会であるだけに、人はそこからその快樂の頂点をきわめがちである。一国の君主ともなれば、なおさらそうした傾向がつよいであろう。目睹する世界の事物、心象の世界、そうしたところから由來する快樂に、景公は性格的に淫しがちであった。だとすると、景公にとって快樂の頂点である遊びのときが、なんらかのいみで「盛」から「衰」へと向かうことを免れないのも、自然のなりゆきであろう。

人の死と、物事の一つとしての國家の滅亡とは、生きていて、現に齊國の君主である景公にとっては、ともに「亡」の世界のことで

あった。それは現実を超えた世界である。その証しの一つとして、例えば、死の世界のことを考えてみる。死への入口の一つであると考えられる病いからして、すでにみてきたように、それは「氣」のレベルの問題とされてきた。病いの行きつく先の「死」の世界は、見聞や感覺をこえた世界のことである。景公は、あるいみで現実をむさぼり、こだわることによつて、快樂から悲哀の世界へ入りこもうとした。現実にとらわれることによつて、非現実の世界へと景公を導くのが、景公にとっての遊びであったのである。

景公にとって、遊びは、いわば異界への窓口であったのであるが、そこから中へ入つて行かせないように配慮したのが、晏子の諫言の数々であった。晏子の諫言は、景公の異界への参入の度合いが深ければ深いほど、いわばその反作用とでもいえるような力で、景公をそこから現実の世界へと引きもどす働きをした。それらは、一般的ななかたちで、礼の履行を迫るといふしかたで示されることが多い。異界へおちこもうとする弱氣の景公を、あるいは齊の公室をそこへおとしこもうとする景公を、その深淵から跳び上がり、逃れ去らせようとする、反撥力、あるいはその反撥力の源への強心劑としての役わりを、ある時にはかなり有効にはたしたのが、晏子の諫言に外ならない。晏子の諫言が、時として有効に働きた、その力の秘密はどこにあったのであろうか。晏子が死を自覚して、自らの子孫に残したことはの中に、その秘密を解くカギがかくされているように思われる。

○晏子病みて將に死せんとす。其の妻曰く、夫子言はんと欲することなきか、と。子曰く、吾(われ)死して俗の變せんことを

恐る。謹みて爾が家を視て、爾が俗を變ずること母れ、と。晏子病みて將に死せんとす。楹を鑿ちて書を納れ、其の妻に謂つて曰く、「楹の語は、子壯にして之を示せ」と。壯なるに及びて發く。書の言に曰く、「布帛窮すべからず。窮すれば飾るべからず。牛馬窮すべからず。窮すれば服すべからず。士は窮すべからず。窮すれば任すべからず。國は窮すべからず、窮すれば竊すべからず、と。(晏子病將死、其妻曰、夫子無所欲言乎、子曰、吾恐死而俗變、謹視爾家、毋變爾俗也、晏子病將死、鑿楹納書焉、謂其妻曰、楹語也、子壯而示之、及壯發、書之言曰、布帛不可窮、窮不可飾、牛馬不可窮、窮不可服、士不可窮、窮不可任、國不可窮、窮不可竊也)』晏子春秋』卷六 内篇雜下第六) 遺言書を示す、楹語あるいは楹書という語はここに由来する。晏子が「礼」をとり行うこととして説き、そこに期待していた「力」の根源は、結局、柱に穴をあけて封入されていたところの、彼の遺言書をつらぬいている、「窮することなかれ」という一語につきるであらう。布帛の中を極度にきりつめて織りあげると、飾りをつけたらしてその布を有効に役立たせることができない。物事には、プラスする何かのアルファがなければ、現実の力になりえないのであると、晏子はいう。

晏子の景公への諫言の根底には、景公の見つめ、おびえている、「死」や「公室の滅亡」の世界への深い認識があった。晏子は、そうした喪失の世界、あるいは異界の深さを十分に知っていた。そのため、そこから離れ、遠ざかるための力を、用意した。晏子が説いたのは、景公の周囲にただよっている喪失感の深さを上回る、より

強力な、そこからの回復を旨とした、礼的手段の施行であった。そうした晏子の思想の根源にあるのは、この「窮まるることなかれ」と説く、いわば余裕から生ずる「力」にたのむところの多い、「余裕の哲学」とでも名づけるべきものであったと見るべきであらう。この点からして、晏子が「儉省を以て身を治める」人であったと見て、「晏子春秋」を、墨家に收入する考えが古くからあるのであるが、それは妥当を欠くであらう。この書の見録学上の位置づけには、より広い、従来のものとは次元を異にする見地が、用意されねばならない。

注

- ① 山東省、臨淄縣南十里』『讀史方輿紀要』卷三十五。
- ② 蘇輿云、疥不當作痲。周禮疾醫、夏時有痒疥疾、秋時有瘧寒疾、……則虞案、蘇說是。以疥爲痲、此六朝人之誤。……齊侯疾愈一年、其初疥痒、熱入於臟腑、遂成爲熱虐』吳則虞『晏子春秋集釋』四四頁(一九六二年 中華書局刊)。
- ③ 事實、またこれらの疾病については、以下のような記述がある。素問生氣通天論、春傷于風邪、氣流連乃爲洞泄、夏傷于暑、秋爲疾虐』吳則虞、前掲書四四頁。
- ④ 病水を、『晏子春秋譯注』(一九九一年十一月 孫彥林、周民、苗若素共訳 齊魯書社刊)では患水腫病(二八五頁)と訳している。なお水腫とは浮腫のことであり、むくみの出る病氣のことを一般にいう。この病氣には腎臟および心臓性浮腫、急性腎臟炎、腹水などがある。『中日大辞典』増訂第二版 一七三三頁(愛知大学中日大辞典編纂処編 一九八七年大修館刊)参照。
- ⑤ 吳則虞の前掲書では、特に「晏子春秋重言重意篇目表」を設けて、この二つの文章をこの表に收入している。(六六三頁)。また、盧文弨云、元刻末注云、此章與逢于何謂合葬正同、而辭少異、故著于此篇』吳則虞 前掲書四五九頁。

さらに、外篇第七について、以下のような記述もある。孫星衍云、俗本以此附内篇。于鬯云、外篇二篇、元刻本一題、重而異者、一題、不合經術者、今復識別。吳則虞 前掲書四三二頁注(一)。

⑥ 例えば、『春秋左氏伝』襄公三十年に、吾儕小人食而聽事、猶懼不給命、而不免於戾、焉知政とある。

⑦ 蘇輿云、治要牖作牖。音義作牖注云、牖當墉、詩傳、墉、牆也。吳則虞 前掲書一五〇頁 注(五)。

⑧ 王風、大車。

⑨ 合骨、合柩は、一般には合葬という。例えば、古時風俗、夫婦死後安葬在一起、稱之爲合葬。……作爲一種夫婦死後合葬の風俗、源于西周。宋代高承、『事物紀原』、「合葬」記載、禮記、曰、檀弓云季武子曰、合葬非古也、自周公以來未之有改。……然而、夫婦合葬之俗的盛行則是在西漢中期以後。申士英、傅美琳編著『中国風俗大辞典』(一九九一年十二月 中国和平出版社出版)一七八～一七九頁。

⑩ 吾何修而可以比於先王觀也。『孟子』梁惠王下。この「觀」を、朱子は觀、遊也という(『孟子集注』卷二)。

⑪ 逍遙遊すなわち逍遙(こころまかせ)の遊びとは、何ものにも束縛されることのない絶対的自由な人間の生活という意味である。『福永光司』『莊子内篇』(昭和四一年 朝日新聞社刊)一頁。

⑫ 晏嬰、墨者也、自以儉省治身。『列子』楊朱篇 張湛注。なお、張湛は東晉の学者。山東省の人で、在世は西曆紀元四世紀ごろとされる。晏嬰の死後、約九百年たつて、晏嬰が活躍した場所とあまり離れていない所で、張湛は生まれたのである。

(付記) 小稿の拠った『晏子春秋』の本文は、二十二子本である。現在では孫星衍の校定したこの本文と音義、および黄以周の校勘記とは、一九八九一年、上海古籍出版社出版の諸子百家叢書のうちの一冊、『晏子春秋』等